

# ゲーテの『秘儀』とその探求、及びシュタイナーの解釈

山 川 淳 生

## 序

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) の『秘儀』*Die Geheimnisse* という著作は 1784-1785 年頃、ゲーテが 35、6 歳の頃に書いた未完の宗教的物語詩である。未完成であるということもあって、この著作はゲーテの著作のなかでもあまり知られているものではなく、この著作に関する研究も、大きな影響を受けた思想家、哲学者、作家などもあまり見られるものではない。そのようなこの『秘儀』ではあるが、これを扱い論じたことのある著名な人物としてはまず神秘主義思想家ルドルフ・シュタイナー Rudolf Steiner (1861-1925) が挙げられる。それに関しては本文で述べるが、まずは本論文の進行をここで示したい。

はじめに、この『秘儀』の背景とそれに関わる時代的風潮から紹介し、次に『秘儀』の物語と後年のゲーテ自身による『秘儀』解説を見ていく。そこでは、ゲーテが「宗教の原点」というテーマを探求し『秘儀』のなかで表現しようとしていたということを見ていく。その「宗教の原点」は、その時代の風潮にも呼応した、宗派や派閥の儀式的的方法論を越えた調和的な「普遍的な信仰」への探求でもあった。また次にはこの『秘儀』のもうひとつの様相として、この著作の持つ「錬金術的要素」について見ていく。それについて論じたものとしてシュタイナーのいくつかの講義も参考にする。そこでは、ゲーテの『秘儀』がヨーロッパの錬金術の伝統のもつ一側面、すなわち錬金術の書が抽象的に語る実験の叙述は、実験者に精神的変容を起こすものであるという考え方によって読み解かれているということについて見ていく。そして最後にはこの『秘儀』が持っているテーマである「普遍的な信仰」へと至るなかでゲーテ

が「デモーニッシュなもの」と呼んだ概念を感じ取っていったということについて見ていく。

ゲーテの『秘儀』には、以上のような「宗教の原点」「錬金術的要素」「デモーニッシュなもの」へ至る道筋」という要素が見受けられるということが、本論文の主旨である。

## I. 『秘儀』とその背景

まずはこの『秘儀』の特色とその背景を見ていきたい。はじめに述べた通り、『秘儀』は未完成の物語であるが、ゲーテによればこの『秘儀』は「あまりに大きな形ではじめすぎた」<sup>1)</sup>という。つまり、ゲーテは『秘儀』の執筆において、ある大きなテーマをその中に表現しようとしていたことが分かる。後にその内容は詳しく述べるが、ゲーテ自身が書いた『秘儀』の解説を参考にすると、彼は当時知られていた世界中の宗教の持っている特徴と共通点から「宗教の原点」というテーマを想定し描き出そうとしていたことが分かるのである。

このようなテーマは、彼が生きた時代の風潮と基本的に呼応している。当時は新大陸アメリカの先住民やロシアの辺境のシャーマニズム的な宗教、そしてペルシアやインドへの旅行記などを通してイスラム教だけでなく、ゾロアスター教、ヒンドゥー教をはじめとするインドの宗教などが、前世紀から少しずつ積み重なってヨーロッパへと入って来ていた時代であった。そしてそれはヨーロッパに新しい刺激を与え、それ以降の思想の方向性に強い影響を与えた。

特にそれは、ヨーロッパを支えてきた前時代の従来のある方に相対的視点を与えたのである。1786年に東洋学者ウィリアム・ジョーンズがインドの古典語サンスクリットとヨーロッパの言語の共通性を発表し、また香料商人の家に生まれた東洋学者アンクティル・デュペロンがインドの旅を経てゾロアスター教の教典を入手し、翻訳して紹介した。その真偽等が議論を呼ぶこととなったが、こういったヨーロッパの外側、特に東方の持つ文化への興味と期待が高まり、同時に従来キリスト教の世界観よりも古い宗教の原点へも興味が向けられていった<sup>2)</sup>。

そのような時代の風潮とともに、特筆すべき影響をゲーテに与えたのが思想家ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー Johann Gottfried Herder

(1744-1803)である。ゲーテはライプツィヒ大学を病気で退学した後、故郷フランクフルトで療養生活を送った。そしてその病気の回復後、再び大学で学び直す為に1770年にストラスブール大学へ入学し、そのストラスブールでゲーテはヘルダーと出会った。当時ゲーテは21歳、ヘルダーは26歳であった。

ただ毎回あまり爽やかな交流というわけではなかっただろう。彼らはお互いに強烈で極端な性格の者同士であったが、特にヘルダーには人のなすことに何でもけちを付け不平不満を言う性格があり、ゲーテに対してもそのように振る舞った。ゲーテとヘルダーはお互いが分かりあえないことは自覚していたようだが、基本的にゲーテはヘルダーの著作には感銘し、大きな影響を受けていった<sup>3)</sup>。

そのヘルダーはこの時代の「宗教の原点」に対する興味と探求を行った人物であった。例えば1772年の『言語起源論』*Abhandlung über den Ursprung der Sprache*、1784年から1791年にかけての『人類の歴史と哲学への諸理念』*Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*（通称『イデー』）といったヘルダーの代表的な著作で描かれる存在の「原型」の考えなどにそれは見られる。ヘルダーは「原型」の概念を *Hauptform*, *Typ*, *Haupttyp*, *Prototyp*, *Urbild* といった言葉で表現しており、『イデー』のなかでは「あらゆる被造物にはひとつの原型 (*Urbild*)がある」と述べている。こういった視点は、原植物 (*Urpflanze*) などにみられるようにゲーテの自然科学観にも影響を与えた<sup>4)</sup>。

またヘルダーは1778-1779年の『民謡詩』*Volkslieder* でギリシア・ローマ・西欧だけでなくラップランドやグリーンランド、ペルーなど前述の『言語起源論』でも扱ったような広い範囲の民謡を集め、1782-1784年の『ヘブライ詩の精神』*Vom Geist der Ebräischen Poesie* で旧約聖書のなかに超越的で不可侵な神の教えでなく古代ヘブライ人という民族の文化と精神そのものを見ようとした。

このように、当時知られていた世界中の宗教から既存の宗教のあり方に新しい観点を見いだし、同時にその原型という視点から世界中の宗教や民族文化の同源性を考え、従来のヨーロッパ優位の文化観ではなくヨーロッパ以外の文化に対してより寛容な観点を持っていた。

ゲーテとヘルダーは1776年頃よりお互い疎遠になっていたが、1783年8月28日にゲーテがヘルダー夫妻を自らの誕生日に招待した後に関

係が再開した。その後のゲーテの1784年8月8日のヘルダー宛の手紙と同日のシュタイン夫人宛の手紙から、ゲーテがヘルダーと『秘儀』のテーマとなるこの宗教的テーマについて話し合ったこと、及びこの詩のテーマがヘルダーに負うものであり、ヘルダーとシュタイン夫人に捧げる詩であることが読み取れる。すなわち、『秘儀』執筆にはそのようなヘルダーとの対話がきっかけとして存在しているのである<sup>5)</sup>。

『秘儀』はこういった宗教の原点、原型という大きなテーマを持って執筆がはじめられたのである。しかしながら、その物語は未完成に終わっている。その理由に関しては、いくつかのことが言われている。

まず一つ目の理由は前述の通りそのテーマが大きすぎたことにある。そして二つ目の理由としては1786年から2年間のイタリア旅行の出發によって書き終えることへの興味が減退したことも挙げられる<sup>6)</sup>。最後に三つ目の理由としてイルミナティ（啓蒙会）等のゲーテが所属していたものを含む秘密結社同士の対立によるものだという考えもある。

秘密結社に関して言えば、ゲーテはこの『秘儀』執筆の4年前である1780年にフランクフルトでフリーメイソンに入会、また1783年にはイルミナティに入会している。そのイルミナティは啓蒙主義的思想とそのような教育でもって、徹底した平等主義と徳の存在する新しい理想的な社会へと改革を進めるという社会改革的な動きを持っていた。それに対して、当時のドイツのフリーメイソン系で薔薇十字団の思想を受け継いだ秘密結社「黄金薔薇十字団」は錬金術的な神秘学の伝統的知識を持ち、当時のエリート層や政治的重役たちとの関わりが深かった。そのために保守的な傾向を持ち、革新的なイルミナティと対立していたのである。丁度『秘儀』の執筆の頃、イルミナティの結社があったバイエルン王国では1784年に秘密結社が禁止され、1785年には黄金薔薇十字団の手によってイルミナティの拠点は警察に弾圧させられた。それ以降イルミナティは勢力を失い、18世紀末には消滅したといわれる<sup>7)</sup>。

そのような社会的状況に配慮して、秘密結社の象徴に満ちた『秘儀』の執筆は断念されたとも考えられるのである。それにはすでにヴァイマルの重臣であったゲーテの立場上の問題もあったのかもしれない。とはいえ、1796年の『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』*Willhelm Meisters Lehrjahre*における「塔の結社」など、これ以降も秘密結社が主題として用いられている作品が書かれており、それが代表作となって

いるのも確かである。

これらの秘密結社への参加は、その思想に共鳴して、また自然の神秘への興味からのことであったと言われる。数年後のイタリア旅行中にはゲーテはフリーメイソンへの興味が減退したような発言をしており、更に後の1812年にはフリーメイソンへの義務を打ち切っているが、その後でもフリーメイソンを讃える詩をいくつも贈っており、その存在感は十分すぎるほどである<sup>8)</sup>。

このように、主題が大きすぎたこと、イタリア旅行、秘密結社と政治との絡み、といった三つの未完の理由を見てきたが、おそらくそれらすべてが重なって、またゲーテの興味も移り変わりこの『秘儀』は結局未完に終わったのではないと思われる。

ただ、『ヴィルヘルム・マイスター』や『ファウスト』といった大著作のように、ゲーテは中断していた執筆を後年に再び始めることも多い作家だが、それにも至らなかったのである。それもまた『秘儀』の特色であって、再び執筆を初めて完成させる意欲が湧く程ゲーテ自身興味が続かなかったのか、あるいはそれでもやはり主題が完成させられないほど大きすぎたということであろうか。

## II. 『秘儀』の物語とゲーテの解説

では次にこれより、その『秘儀』の物語の内容と、ゲーテ本人によるその解説の詳しいところを見ていく。まずは、物語を特に重要な箇所のみでまとめると、以下ようになる。

旅の修道士マルクスは食糧と休息できる場所を求めて木々の生い茂る深く険しい山のなかをさまよっていた。そして丁度山の頂上にさしかかって太陽が沈みだす頃、鐘の音がきこえた。その音をたよりに行った先には、なだらかな谷のなかに修道院があり、その修道院には「薔薇にびっしりと覆われた十字架」*das Kreuz mit Rosen dicht umschlungen* が掲げられていた。そしてその十字架からは「三つに重なる光」*Dreifacher Strahlen* が輝いていた。

マルクスがその修道院の扉を叩くと、彼はひとりの老人によって迎え入れられた。老人は歓迎の言葉とともに、丁度いまある人物が修道院を

去ろうとしているということと、その人物の数々の逸話を話しはじめる。

その人物が生まれる前、彼の母に精霊（Geist）が彼の誕生を告知した。そして彼の洗礼の儀式の際には、夕空に祝福の星のような光が輝いていた。またそのとき一羽のハゲタカが中庭の鳩の群れの中へとやってきて、他の鳩たちを襲うでもなく鳩たちと一体となって群れを導いていった。

彼が少年の頃には、彼の妹（Schwester：妹あるいは姉）にからみついてきたマムシを退治した。また、彼が剣で乾いた岩を打つと泉が湧き出て来た。そして、彼が戦士たちと馬の世話役や伝令役として仕えるため戦場へ送られたとき、薬草を摘んで負傷者たちの手当を行い、彼が手を触れた者たちはたちどころに癒えていった。こういった数々の逸話を語り終えると、老人はその人物は「フマース」 という名の者だと明かす。

やがてマルクスは他の修道士たちとともに食事に招かれた。その食事の後、彼は修道院の大聖堂へ案内された。そこには 13 の椅子と小卓、及びそれに呼応する 13 の紋章が描かれた楯があった。そしてそれらの並んだ楯の中心には「薔薇の十字架」が描かれた楯があった。そしてその中央の楯の左右には「燃えさかる炎のなかで喉の渇きを癒している火の色をした竜」と「血が流れ出ている一本の腕を口にくわえた熊」の紋章を持つ楯がかけられていた。

そこで先ほどの老人が再びマルクスに話しかけてきた。「驚くべき（wunderbar）道を通ってあなたはここへやってきた。何人もの英雄たちの経験した出来事をあなたが経験するまで、あなたにここに居続けてほしいと、紋章たちが望んでいる。この場所に隠された意味は、推測できるようなものではない。今、あなたはこの一番初めの扉をくぐりぬけた。これより中に入って、そして最も深い場所まで、あなたは辿り着く事ができるように、私には思える。」と老人は告げた。

その後マルクスが部屋で眠っていると、彼はかすかな鐘の音に目を覚まし、その音をたよりに礼拝堂へと行った。耳をすますとそれは時計の音や鐘の音ではなく、同じ間隔で三度、至高なる銅（hohes Erz）をたたくような音であった。その音には彼の心を喜ばせるものがあった。

なおもその音を追っていくと、窓の外の庭園に 3 人の青年を見た。彼らは白く光る衣装を着て頭は花環で飾られていて、腰の帯は薔薇でできていた。彼らが星の消えていくように遠方へと消えていく描写でこの話

は終わる<sup>9)</sup>。

このように特徴的な象徴が非常に多く現れているが、まずはその修道院の「薔薇の十字架」が目につくであろう。これは彼らの時代に話題となっていた「薔薇十字団」を思わせるものがある。

薔薇十字団とは、錬金術が最盛期を迎えた16世紀後半ののちの17世紀初頭に名前があがりはじめる都市伝説的とも言える秘密結社のことである。それゆえ、薔薇十字に関して歴史的事実として確信的なことはわからない。前述の同じ秘密結社でもフリーメイソンやイルミナティ以上に、果たして本当に存在していたのか、どこまでがただの伝説で、どこからが歴史的事実なのか、はっきりとわからない。

薔薇十字的文書として残っているのは、1614年にドイツのカッセルで『薔薇十字の名声』*Fama Fraternitatis*、翌15年に『薔薇十字の信条告白』*Confessio Fraternitatis* といった著者不明の薔薇十字団の教義の宣言文書がまず挙げられる。『薔薇十字の名声』のなかでは薔薇十字団の創設と由来が書かれており、その開祖CRCなる人物の経歴も述べられている。次の『薔薇十字の信条告白』ではその薔薇十字団の哲学・思想が展開される。そして1616年にはストラズブルで『クリスチャン・ローゼンクロイツの化学の結婚』*Chymische Hochzeit Christiani Rosencreutz* という錬金術的なモチーフと展開を持つ小説が出版された。『化学の結婚』はルター派の牧師ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエを中心とするテュービンゲンの学者グループによって執筆されたとされている。薔薇十字団の開祖のCRCという人物の名は、ここではじめてクリスチャン・ローゼンクロイツという名と関連させられた。

こういった薔薇十字団の存在に関する議論は、今日に至るまで続いている。薔薇十字団が歴史的に存在したという見解、また『化学の結婚』のアンドレーエがそもそも創業者であるという見解、人々の想像の産物であるという見解、など様々な見解が存在し、またフリーメイソンとの関連性なども議論される<sup>10)</sup>。

時系列的には『秘儀』より後のものではあるが、1786年の6月28日の書簡でゲーテはシュタイン夫人宛にこの「クリスチャン・ローゼンクロイツの結婚 (Christian Rosenkreuz Hochzeit)」を読んだと述べ、その著作内にある句を模した詩を贈っている<sup>11)</sup>。そしてそのアンドレーエ

の著作『化学の結婚』をゲーテはヘルダーから紹介されたといわれている<sup>12)</sup>。このような「薔薇十字団」の印が『秘儀』の舞台である修道院の象徴として掲げられ、物語は明らかに薔薇十字団を意識していることがわかる。

そして次に見られる特徴的な箇所は、その修道院の老人から紹介されるフーマヌスという人物の逸話である。ラテン語で人間、文化を持った人間などを意味する *humanus* からとられているが、そのような名を冠した人物がまず物語の中心を担っている。

彼に関しては誕生の告知、星の祝福、負傷者を癒した話、など、イエス・キリストを思い起こさせるものがあるが、しかしながら天使というよりも精霊 *Geist* からのお告げである等、いくつかの点において異なっている。また妹の体に絡み付いた蛇を退治する話は、ギリシア神話においてヘラが放った蛇が赤子のヘラクレスと彼の双子の兄弟が眠るゆりかごに入って来たときにヘラクレスがその蛇を素手で殺した話や、キリスト教の聖人ゲオルギウスが大蛇（ドラゴン）を退治して生け贄の娘を救った話を思い起こさせる。

そして再び修道院の大聖堂で、十三の楯の中心にある紋章に「薔薇の十字架」を見る。そして最後に登場する三人の青年の腰帯がやはり「薔薇」であった。この三人の青年の風貌もまた特徴的であり、どこかキリスト教の修道士風というよりも、前述のフーマヌス誕生の告知が天使ではなく精霊であるのと同様に、異教徒風のものがある。

全体を通して、キリスト教的な象徴に、常にどこか異教的なものが混ぜ合わさせられているのである。そして修道院自体だけでなく「中心」の楯、すなわち修道院の中心人物であるフーマヌスのものと思われる紋章が薔薇十字であり、フーマヌスという存在が薔薇十字と一致させられている。

以上のようなことがまず見てとれることである。引き続き、この『秘儀』のゲーテの解説を見ていくことにしよう。この『秘儀』解説は執筆と同時に書かれたようなものではなく、執筆後30年近く経った頃のものである。北ドイツの都市の大学生によるグループからこの『秘儀』の物語の持つ意味を明かしてほしいという要請に応じて、1816年4月27日の『モルゲンブラット』*Morgenblatt für gebildete Stände* においてゲーテ自身がこの物語に関する解説を書いた。そこでは、以下のように語ら

れている。

では、この詩の続きとして練っていた全体のテーマ、あるいはその全体の計画とその目的とを知ってもらうために、次のようなことを言っておきたい。読み手はここで精神的な (ideeller Montserrat) モンセラート山<sup>13)</sup> のようなものへと連れて行かれることを通して、宗教という様々な標高の高い山と岩壁、岩山の険しい道を経験し、時期がくれば再び、喜ばしいことに広い平野へと辿り着くことだろう。そして騎士修道士たちひとりひとりの全員のもとを訪ねて、風土や国の違いによる考え方の違いを経験していくことで、世界の東西南北の果てからそれぞれやってきた素敵な人々がそれぞれ彼ら自身のやり方で争うこともなく自らの神を信仰している、ということが分かるだろう。

修道士マルクスとともにこの世界を探索する読者あるいは聴き手はこのようにことに気づくだろう。様々な考え方や受け取り方の方法というものは環境、地域、民族性、その求めるもの、その習慣、とがそれらのもとで育ち、あるいはその者に刻み込まれるのであるということに。そしてこの場所ではその際立つ個性がはっきりと見て取ることができる。最高のものへと育つこと (höchste Ausbildung) への願望に対しては、彼らが自分ひとりだけの力では完全にものにすることはできなくても、ひとりではなくともに共同生活を送る事でそれは意味を為すということを体現するために彼らはここに招かれたのである。

このことを為すために、フマーヌスという名の人間のもとに彼らは集まったのである。加えて、彼らが全体としてフマーヌスに自分と似たものを感じ取り、親近感を覚えることがなかったら、そのようなことにはならなかっただろう。そして今、この仲介者フマーヌスが思いがけず彼らのもとを去ると言い出したのである。彼らはひどく戸惑いながらも、そのフマーヌスの過去についての話を聞くのである。けれどもフマーヌスがひとりでそれを語るのではなく、フマーヌスと共にこれまで生活してきた 12 人皆がその大いなる人生の遍歴について語り合うのである。

ここで分かることは、あの高き指導者であり仲介者であるフマー

ヌスに近づき、そして彼と一体化したことで、その瞬間にそれぞれの特別な宗教がそのとき最高の境地へと開花し実を結ぶに至ったということである。この経験がこの代表 12 人のなかに肉付いて、また定着して具現するのだ。それゆえ私たちは神と道徳の認知のすべてを、それらがどのような驚異的な姿であられるとしても、全ての名誉と愛に値するものだという事に気づかねばならない。そして今この長い共同生活のあとにフマーヌスが彼らのもとをあえて去るのである。なぜなら、彼の精神は彼ら全員のなかに肉付いているし、もう彼らのなかにあって、最早（フマーヌスには）彼自身の現世的肉体など必要ではないからである。（中略）

もしこの物語の筋全体が受難週<sup>14)</sup>に起こったことで、この共同体の中心的象徴が薔薇に覆われた十字架であるならば、復活祭によって運命付けられた高次な人間的状態の永続性 (durch den Ostertag besiegelte ewige Dauer erhöhter menschlicher Zustände) もまた、ここでフマーヌスとの別れに際してそのことへの慰めとなりつつ明示されているということも、簡単に予測できる<sup>15)</sup>。

また 1815 年 8 月 3 日にゲーテの友人ボワスレー Sulpiz Boisserée はゲーテがこの秘儀について語ったことについて述べている。

ゲーテは言った、他の多くのものと同じように、彼はこの『秘儀』をあまりに大きなかたちではじめすぎた。12 人の騎士たちは 12 の宗教を表していて、それらは皆あとになって意図的にもつれ合うようになっていく。この事実と物語的要素とのどちらが本当にあったことが逆転して、今本当にあったとされることへと行き着くのだ<sup>16)</sup>。

ゲーテらしく、解説になっているとは言えないような具体性を欠いた言い回しばかりであるが、少なくともこれらの解説と書簡から、まず修道院の 12 人の修道士たちが世界中の 12 の宗教をあらわし、そしてその中心人物フマーヌスがそれら 12 の宗教の原点であるということはわかる。つまり、ゲーテが彼の時代とヘルダーとの交流によって作りだしたテーマをそれによって表そうとしたというわけである。

その「宗教の原点」たるフーマヌスという人物の役割についても解説されている。物語中でもイエス・キリストの逸話が暗示され、また薔薇十字の紋章の所有者であった彼が登場人物である12の宗教の原点であり、12の宗教を導き、高める存在だと述べられている。そのような「宗教の原点」を通して「最高の境地へと育つこと」がなされるという構造が特徴的である。

それは言うなれば、他宗教は自分と違う存在ではあるが理解不能な存在を信仰する敵としてではなく、同じ者を先祖とする親戚のようなものだけということを知り、その心で相手を理解することである。そしてそれは相手の信仰と自分の信仰の共通点から「宗教の原点」のイメージを構築し、そのことを意識して生活することで得られるというように述べられている。

そのようなフーマヌスの逸話は、イエス・キリストの逸話のなかに異教的要素、キリスト教の聖人伝の要素、ギリシア神話の要素が微妙に混ざり合ったものになっていた。ここからはゲーテが宗教の原点をどのように描こうとしていたかが分かる。つまりヨーロッパのキリスト教で信仰されている聖書の正統なイエス・キリスト像を宗教の原点とするのではなく、その正統的なものも異教的なものも、更には聖人伝説もギリシア神話も同源として描こうとする態度である。

ある種ゲーテはキリスト教の正統的な宗派も全ての宗教のなかで絶対的にそれだけが正しいというわけではなく、そのような流出した個別の宗教のひとつとして扱っているわけである。そして、世界中の個々の宗教は同じ源流を持ちながらも、ある「宗教の原点」からそれぞれに違う要素を抜き出し、そのことを何度も繰り返して、更にはその抜き出した要素もまた時代や環境、民族的欲求に沿って改めることで、個別になっただけだとも考えていたわけである。

以上のことは比較的はっきりと解釈が可能なことだが、しかし同時に示唆されている「薔薇十字」がフーマヌスの象徴であるということによって話はわからなくなってしまう。原宗教=フーマヌス（人間）=薔薇十字という構造が出来上がっているが、ゲーテにとって薔薇十字とはいかなるものであろうか。

ゲーテは前述のように『化学の結婚』を読んでいて、他の薔薇十字の書を読んだかどうかは定かではないが、少なくとも薔薇十字に関する当

時の噂を誰かから聞いたり、それについて誰かと話したりはしたはずである。とはいえ、前述の通り薔薇十字に関してははっきりとしたことが言えないのが実状であり、薔薇十字の基本文書とされる幾つかの書も内容的にはここでゲーテが言っていることを理解する手助けにはあまりなりそうにもない<sup>17)</sup>。

更にゲーテはこの解説のなかで、イエス・キリストと弟子たちの共同生活と訣別に模されたフマヌスと修道士たちの共同生活と訣別は、「高次な人間的状態の永続性」*ewige Dauer erhöhter menschlicher Zustände* のためのものであり、なおかつそのように読み取れるのはこの物語の象徴が「薔薇十字」であるためだ、と言っている。すなわちその「高次な人間的状態の永続性」と「薔薇十字」が関連させられているということ、あるいはこの物語自体がその薔薇十字的思想によって何らかの解釈が可能であるということが、辛うじて読み取れることなのである。

### Ⅲ. 『秘儀』とシュタイナー

ここでゲーテの『秘儀』やゲーテと薔薇十字といった問題を扱ったルドルフ・シュタイナーのいくつかの講義録を見てみたい。

シュタイナーは一般的には神秘主義思想家であり彼の創設した人智学協会とシュタイナー教育において著名であるが、彼はウィーンで大学生活をおくっていた21歳の時から1897年の36歳になるまでキュルシュナー版のゲーテ自然科学論文集の編集に携わり、それと同時に1886年からは今なおゲーテの研究でいつも参照され続けているヴァイマルのゾフィー版のゲーテ全集(WA)において、自然科学論の編集を担当した。また1890年、29歳のときにウィーンからヴァイマルに移住し、そこでゲーテ・シラー文庫館に6年近く勤めた。彼が36歳の時には彼のゲーテ論である『ゲーテの世界観』*Goethes Weltanschauung* (GA6) を出版した<sup>18)</sup>。

シュタイナーの著作と思想の傾向は、大きく三つに分けられる。つまり彼の40歳頃までの哲学・ゲーテ論といった著作、それ以降の神智学協会時代の神智学的語り口の著作、更に51歳以降の人智学時代の、神智学時代の思考をベースとしたより実践的な神秘主義の著作、と分ける

ことができる。

シュタイナーは『自然、及び精神的存在—私たちの目に見える世界におけるそれらのはたらき』*Natur- und Geisteswesen – ihr Wirken in unserer sichtbaren Welt* (GA98) に収められている一連の講義録中、1907年12月25日のクリスマスにケルンで行われた講義のなかで、ゲーテの『秘儀』について講義を行っている（以下、この講義を『秘儀』講義と記す）。この講義は、時代区分としてはシュタイナーの神智学協会での活動の頃である。この講義には、まず一側面としてそのように神智学協会の講義であるため、神智学的な思想や概念の解説にゲーテの『秘儀』を用いているという面がある。つまり、ゲーテの『秘儀』とその解説が神智学の各用語にあてはめられて解説されているという側面を持っている。その前提でこの講義をまとめると以下ようになる。

シュタイナーのこの講義はケルンにおける東方の三博士に関する伝説についての話からはじまる。ケルン大聖堂には Dreikönigenschrein（三博士の聖堂）という黄金の教会のかたちをした彫像があり、そのなかには納められた東方の三博士の骨とされる聖遺物が納められているという。デンマーク王がケルンにやってきたときにケルン大聖堂へ三つの王冠を贈ったところ、王がデンマークに帰国後、彼の夢に三博士が現れた。夢のなかで三博士は三つの贈物「黄金」「乳香」「没薬」の入った三つの聖杯を王に渡した。そして王が目覚めると三博士は消えて三つの聖杯がその場に残っていた、という伝説について語る。

そして、三博士がキリスト誕生の際に贈った「黄金」「乳香」「没薬」の三つの贈物の持つ意味の、神智学的な観点からの解説が続く。それぞれ「黄金」は「自己認識」*Selbsterkenntnis* を意味し、乳香は「自己への敬虔さ」*Selbstfrömmigkeit* と「自己への献身」*Selbsthingabe* を意味し、没薬は「自己の完成」*Selbstvervollkommung* と「自己の発展」*Selbstenwicklung* 及び「永遠なるものを自己のうちに保持すること」*Bewahrung des Ewigen im Selbst* を意味しているという。

そしてその三博士はそれぞれ一人目がアジアの民族を、二人目がヨーロッパの民族を、三人目がアフリカの民族を意味しており、それゆえ彼らは世界中の違った思想・宗教的信条の調和を表している。

そしてそれらの異なったもののなかからひとつの共通の原理を見いだ

す、というその調和のための原理が「キリストの原理」Christ-Prinzipである。こういった世界観は「初期の秘教的キリスト教」esoterische Christen in der ersten Zeitのものだとシュタイナーは語る。

そのような秘教的キリスト教においては、マクロコスモスとミクロコスモスの一致、すなわち例えば宇宙と人間の体は抽象的に同一視され、それぞれの相互にパターン化されたシンクロニシティがあると考えられていた。太陽、月、星の動きから様々な自然現象、人間の社会共同体の成立、法と倫理の成立、道具の発明などすべてが神の顕現であり作用なのである。それゆえに存在の境界を越えてそういったすべての現象に共通するひとつの原理を秘教的キリスト教は見ようとした。

すべての物質はただ単に物質的存在であるだけでなく、「精神的存在」の作用する側面も持っている。自然から星の動き、人間に降りて来る「発明」「思いつき」等のインスピレーション、マクロ的な視点から見える人間の行動、すべてにそのような神、あるいは超越者、「ある魂—精神的存在」die seelisch-geistige Wesenheitの顕現、その意図や法則が現れるというものである。

それはここでは太陽に例えて話がされている。太陽はただ物質的側面を持つだけでなく、精神的存在の側面を持っており、それは複数存在する「魂—精神的存在」たちのひとつである。太陽はキリスト性を象徴するが、しかし人はそれを直視できない。月は太陽光を反射し、そこでそれを直視することはできる。この講義の行われたクリスマスという日は、太陽の「物質的な力」Physische Kraftが最も弱く、夜が最も長い日であるため、その太陽の物質的力が強いうちは眠っている神々も目覚め、「精神的な力」Geistige Kraftはより強くなるのである、という。つまり、夏に太陽の「物質的な力」が強く顕現し、冬に太陽の「精神的な力」が強く顕現する。そのような太陽の「精神的な力」に没入しその奥深くまで心にしみ込ませた秘儀参入者たちが、世界中の信条をひとつにまとめる「ひとつの統一した理念」、その調和と世界的平和の宗教の必要性を感じ、その理念を持ってバラバラな世界中の人々を導く、そういった人々たちとして「マギ」Magi（三博士、マゴスたち）は考えられた、とシュタイナーは言う。

その三博士の示すものが、より高次の地平、より高次の存在への通過儀礼であった。このことを東方の三博士の逸話は贈物の象徴とともに表

しているという。すなわち、三つの贈物、黄金：自己認識、乳香：自己への敬虔さ、没薬：自己完成と自己発展、その過程を通して自身の中に永続性が生まれるというものである。ここまで述べたような秘教的キリスト教の考え方を理解していた最後のドイツ人がゲーテであるとシュタイナーは言う<sup>19)</sup>。

そしてこれより、講義は『秘儀』の物語の内容に関するものへと入っていく。

- ・ 修道士マルクスが見た薔薇の十字架の中心から放たれた三つに重なった光は三位一体を意味し、またそれぞれ物理的肉体、エーテル体、アストラル体を意味すると述べている。そこに加えられた薔薇は自己の象徴であるという。それは秘教的キリスト教において自己を高めるとする使命の象徴でもある<sup>20)</sup>。
- ・ 『秘儀』でフーマヌスの生まれた際に星が空にひとときわ明く輝いていたというのは、ここでは三博士を導いたあの星とつながりを持っている。この星こそが、三つの贈物、黄金：自己認識、乳香：自己への敬虔さ、没薬：自己完成と自己発展を示す存在である。
- ・ フーマヌスの妹が眠っているときに彼女に巻き付いてきたマムシを退治した、という話は、マムシ＝アストラル体、妹＝エーテル体をあらわす象徴である。エーテル体を抑え付けているアストラル体を乗り越えるという象徴である。
- ・ 修道院の広間にある13の紋章の入った盾に、「薔薇十字」の紋章の盾の左右に「炎の色をした龍の紋章」と「一本の血のしたたる腕をくわえた熊の紋章」がある。ドラゴンは一番最初に乗り越えなければならぬものを表している。すなわちアストラル体の燃えるような情熱である。そのドラゴンを乗り越えた生き物としての状態が熊で表されて、ドラゴンを乗り越えた自我が、熊がくわえている手で表されている。
- ・ 眠りのあとにマルクスが聞いた「三つの音のハーモニー」は、アストラルの世界をくぐり抜けてより高次の世界へ近づく者にきこえる音である。彼は音の世界へ、宇宙の調和へ、天球の音楽へと足を踏み入れている。精神世界 (Geistige Welt) とは音の世界 (Welt der

Töne) である。

- ・ゲーテの『秘儀』は秘教的キリスト教の深遠なる秘儀を表している。すなわち、薔薇十字のキリスト教の秘儀を表しているのである<sup>21)</sup>。

この講義のなかで、ゲーテの『秘儀』とその解説で述べられていたことが、神智学の論理と結びつき、その解説の役割を果たしているが、そのような神智学的な用語を別にしてシンプルに考えるとすれば、シュタイナーのゲーテ解釈のひとつの方向性が浮かび上がってくる。

まずシュタイナーはこの講義で、ゲーテには「初期の秘教的キリスト教」の方法論が生きていると述べており、前半部分はゲーテにつながるその「初期の秘教的キリスト教」の考え方の解説がなされている。特にそこでは三博士を通して世界中の宗教の調和的平和の統一の理念が語られており、それはゲーテが『秘儀』で「宗教の原点」として想定した視点とも共通点が見られる。

そのようなシュタイナーにおける「初期の秘教的キリスト教」が何であるかは、シュタイナーの1902年の『神秘的事実及び古代の秘儀としてのキリスト教』*Das Christentum als mystische Tatsache und die Mysterien des Altertums* (GA8) といった著作で特に論じられていることもまた参考になる。

シュタイナーのこの著作では、ヘラクレイトス、エンペドクレス、プラトンといった古代ギリシア哲学、ギリシア神話、聖書の四福音書、ヨハネ黙示録、また特に旧約聖書解釈とギリシア哲学を結びつけて後年のギリシア哲学と初期キリスト教との関連性にも影響を与えたアレクサンドリアのフィロン（紀元前30-15年頃～紀元後40-50年頃）をはじめとするアレクサンドリアの初期キリスト教、更にアウグスティヌスやトマス・アクィナスまでに貫くもの、あるいは無意識的に伝承されてきたものとしてそれらの内にあるその古代の秘儀的方法論が語られている。

古代の秘儀では、ギリシア神話を寓喩的に解釈しそこから人間の精神的変容を得るという叡智が伝授されてきており、そのような寓喩的解釈の方法論はアレクサンドリアの初期キリスト教などでは聖書解釈にも影響を及ぼし、聖書にも寓喩的解釈が応用されることとなったのである<sup>22)</sup>。そしてこういったものに共通する神話や聖書の寓喩的解釈という方法論がゲーテのなかにも生きているというのがこのシュタイナーの『秘儀』

講義の論点である。そして古来より受け継がれてきたその物語の寓喩という方法論は、ヨーロッパの近代までは「錬金術」のなかに生き続けたのである。

このような観点は、ヨーロッパの神秘主義の伝統においてヘルメス学や錬金術が構築してきたとされる学問体系の考え方に乗っ取ったものでもある。錬金術の書に書かれていることは、実際の現実的な物質を扱った化学実験の過程を表しているとも取れるが、それは強い抽象性や寓喩性を持って書かれる。そのため、錬金術師がその抽象と寓喩を通して精神的に理解し自らを高めるべきことを表しているとも取れるのである。そしてそこでは錬金術師と実験物質の間での心の調和が重視される。すなわち、錬金術師の心のあり方や生き方が錬金術の実験が成功するかどうかにも作用するというものである。そしてその核心はやはり、シュタイナーの『秘儀』講義中にもあるような「マイクロコスモスとマクロコスモスの一致」でもある。ミクロの人間の心がマクロの物質に作用する。つまり、錬金術を行う者の心のありようが、対象となる物質やそこで起きる変化のありように作用するのである。つまり、錬金術の書はただの実験録ではなく、その登場人物や出来事の寓喩を通して考え理解することで人間の精神の変容がなされるという考え方である。そのような錬金術の書における、自然科学というよりも精神変容の方法論と一致するものが、ゲーテの著作に生きているというのが、シュタイナーのゲーテ解釈の方向性である<sup>23)</sup>。

シュタイナーは他の講義でも『ファウスト』や『ドイツ避難民閑談集』 *Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten* に収められたゲーテの創作メルヘンである『メルヘン』 *Das Märchen* といった著作に関するその錬金術的寓喩性について語り、そのような視点でゲーテの著作を見ていることが分かる。

そして実際のところ、ゲーテは確かに錬金術と非常に強い関わりがあった。ゲーテの蔵書目録 *Goethes Bibliothek* のなかには「神秘学」 *Geheimlehren* の項目があり、ヴェリング Georg von Welling の『魔術的カバラと神智学の書』 *Opus mago-cabbalisticum et Theosophicum* やアグリッパ・フォン・ネットスハイムの『神秘哲学』 *De occulta philosophia libri tres* やトンマーゾ・カンパネラの『事物の感覚と魔術について』 *De sensu rerum et magia* といった著作が見受けられる<sup>24)</sup>。そしてまた、

何よりもゲーテ自身が錬金術と出会うきっかけが非常に強烈なものであった。

そのことに関して、1907年5月22日から6月6日までのミュンヘンでの連続講義録『薔薇十字団の神智学』*Die Theosophie des Rosenkreuzers* (GA99)の最初の講義(5/22)においてシュタイナーはゲーテの錬金術的源泉について語っている。

その講義では、ゲーテは若い頃に「薔薇十字的な源泉」*eine rosenkreuzerischen Quelle*に近づき、「ある非常に特異な高次の秘儀参入」*eine höchst merkwürdige hohe Initiation*を受け取ったと述べられている。これは、ゲーテと錬金術のある出会いのことを指している。

そしてシュタイナーはそのような「ゲーテの秘儀参入について話すことは、簡単に誤解されうる」と言う。そのように言った上で、1768年から2年間のゲーテの重病こそがシュタイナーの言う薔薇十字的な秘儀参入だと言う<sup>25)</sup>。

その時代の詳細は1811年から1831年にかけて書かれたゲーテの自伝『詩と真実』*Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit*の第二部第八章に詳しく述べられている。1765年にゲーテは泥にはまった馬車を引き出そうとして胸を痛め、それ以降時折感じていた胸の痛みが1767年の落馬事故以降さらに激しくなり、また食生活などから腸も機能低下をしていた。更には失恋を含む精神的なストレスもあったのだろう。1768年6月には激しい吐血をして数日間生死をさまよった。そしてその病状が回復をはじめたと思えば今度は首の左側に腫瘍ができていたのが見つかった。同年9月、19歳のゲーテはライプツィヒ大学法学部を退学し、静養のため故郷フランクフルトに戻った。

その病気の間、ゲーテは母方の友人クレッテンベルク嬢(Susanne Katharina von Klettenberg)と出会い、彼女から病気の意義や神と自分との関係を教わり、そしてスウェーデンボリなどの著作をともに読んだ。彼女からは神秘主義的なキリスト教の方向性を受け取ったと言えるだろう。

またゲーテの首の腫瘍を担当した医者も、同じく神秘主義的な方向性を持った人物であった。ゲーテは1768年12月頃に最も病状が悪化し、死の淵に立たされていた。そのような状態のなか、医者はゲーテの母にせがまれ、「彼の万能薬」*seine Universalmedizin*である「乾燥した結晶

塩」kristallisiertes trocknes Salzをしぶしぶゲーテに飲ませた。するとゲーテの病状は一転して快方に向かって行った<sup>26)</sup>。

この一連の闘病生活が秘儀参入であり、ゲーテ本人は全く気づいていなかったがこの秘儀参入の力によってゲーテの魂には「詩的靈感（インスピレーション）のようなもの」eine Art poetischer Strömungが流れ込んだ。その靈感の稲妻 Lichtblitzがゲーテに『秘儀』を書かせた。この力は他のゲーテの著作にも現れている。しかし『秘儀』はあまりにテーマが深すぎて、ゲーテはそれを結末まで導く力を再び見いだせなかった、とシュタイナーは語る<sup>27)</sup>。

ゲーテはこの闘病体験の後、前述のヴェリングの書にならって錬金術の実験を実際に自分で行った。その実験は失敗したようだが、そのことは錬金術が「自然科学」ではなく「精神科学」のようなものだとしてゲーテに理解させたのかもしれない。

これらの時期をシュタイナーはゲーテの「薔薇十字的源泉」への秘儀参入であると言う。ここでひとつ分かることは、錬金術の思想と薔薇十字の思想をおおよそシュタイナーが同一視しているということである。実際のところ、薔薇十字団という秘密結社の目的は、人々の病気の治癒を無償で引き受けること、そしてそのような治療活動を行うために自然を理解し読み解く研究をするということであり、その研究はすなわち錬金術的な研究である。

ここから、シュタイナーの歴史観のなかでは、古代の秘儀の叡智から初期秘教的キリスト教に受け継がれ、ヨーロッパには錬金術として知られたそれが、次に薔薇十字団へと受け継がれていったという図式ができあがる。ただし、錬金術の伝統のなかには、寓喩のための精神的なことから単純に解釈し現実の科学実験にあてはめて行うことや、そういった解釈の間違い、歪曲によって無意味なものや欺瞞に満ちたものになってしまったものも多いともシュタイナーは述べる<sup>28)</sup>。

そのような間違っただけのものも多くなかで、シュタイナーは薔薇十字的論理、錬金術的の論理、初期秘教的キリスト教の論理、秘儀の叡智、これら全てのなかに貫くひとつの叡智的な共通要素を見ているのである。そしてそれが闘病生活における錬金術的なものとの出会いによってゲーテへと伝わったという解釈ができる。

実際のところゲーテの病気をほんとうに治したものが何であったのか、

その錬金術的な塩であるか、あるいはそれは無関係でゲーテ自身の自然治癒力であったかなどは知り得ないが、錬金術に手を延ばさせるようなその投与のタイミングが重要だったということだろう。

まとめるとゲーテの「宗教の原点」は聖書やキリスト教の各聖人伝やギリシア神話の元型的起源であるとともに、「薔薇十字的伝統」の起源でもある宗教思想として想定されていたという考えが、ひとつの解釈方法としてシュタイナーから提示される。

すなわち、ゲーテは解説で「薔薇十字」という象徴によってこの謎めいた『秘儀』の物語の意味は明らかになるとほめかしていたが、その「薔薇十字」とはつまり錬金術的伝統の象徴であり、それは物語の寓喩的解釈による精神変容をさしている。『秘儀』はその錬金術的な寓喩的解釈と精神変容をあらわした物語である、という視点がこのシュタイナーの思想によって得られる解釈方法である。ゲーテが解説でほめかしていた「薔薇十字」を以上のように解釈できる。

#### IV. 「デモーニッシュなもの」と『秘儀』

ここで『秘儀』のもうひとつの視点として、ゲーテの自伝『詩と真実』の最後の章である第四部二十章に語られていることにも目を向けたい。

『詩と真実』は1811年に第一部が完成した後1814年の第三部完成以降、1831年の第四部完成の間に大きな時間的空白がある。第四部の完成はそうのように1831年、出版はゲーテの死後の1833年であるが、この第四部二十章はゲーテの日記によれば、1813年4月頃に既にこの構想ができていたことが述べられている<sup>29)</sup>。そこでは、以下のように述べられている。

この自伝のなかで、読者は手間をかけて、その子供が、少年が、若者が〔ゲーテのこと〕色々な方法で五感を超えた存在 (Das Übersinnliche) に近づこうと試みたのを見てきたであろう。最初は自然宗教 (natürliche Religion) へと目を向け、次に愛を持ってそのうちにひとつと肯定的に強く結びついた、更にはそこへと自分の力を集中させることを試み、ついに普遍的な (allgemein) 信仰

へと喜びを持って没入していくこととなった。

彼がこれらの宗教の間の道筋を行ったり戻ってきたりとさまよい、周りを見回して、道を探し求めていたとき、彼はそれらの何にも全く属していないであろうものに出会った。そして彼はよりいっそう、あまりに巨大で (Ungeheuer)、理解の及ばないもの (Unfasslich) について考えることは、控えておいたほうがよいであろう、と理解した。彼は自然のうちに、命があるものとないもの、魂が与えられているものとないもののうちに、何か相容れないふたつのもののなかだけに現れそれゆえにどのような概念でも、なおさら言葉ではよりいっそう把握され得ない何かが見つけれられると思った。それは神なものではなかった、なぜならそれは理性的でも、人間的でもなかったし、理解力を持っていなかったからだ。また慈善を行う心を持っていたから、悪魔的でもなかったが、人を傷つけて喜ぶ心を持っていたから、天使的でもなかった。それは間隔を隔ててやってくるものであったから偶然の出来事のように思えたが、それらの間に関係性が示されていたから神々によって決定付けられた神意のようにも思えた。そのたぐいものは私たちの間に境界線を設けている全てをもすり抜けてこちらにやってくるようだ。それは私たちの存在に絶対不可欠なものでもって勝手気ままにスイッチを入れたり消したりする。それは時間を一箇所に縮め、空間を広げていく。それは不可能性を好み、可能な余地のある状況は嫌悪感をもって突き放す。この存在はあらゆるモノのなかに入り込んで、それを選り分けたり結びつけたりするように思われる。これを私は、古代の人々及びこれと似たようなことに気づいた人々の前例にならって、デーモンニッシュ (Dämonische) なものと名付けた<sup>30)</sup>。

ここでもゲーテの宗教観とその遍歴が述べられている。そのなかでも最初のほうでは、相変わらず具体的には述べられていないが、ゲーテは「五感を超えた存在」を追い求め、「普遍的な信仰」へと到達した、という叙述がなされている。この箇所は、今まで本論文中でもシュタイナーのところで述べてきたような「錬金術的な精神変容」を遂げることで「普遍的な信仰」の境地へとゲーテが辿り着いたことの叙述のようにも解釈できる。

また同時にここで叙述された「普遍的な信仰」という考え方は、『秘儀』の「宗教の原点」で表現しようと目指していたもの、そしてシュタイナーが『秘儀』講義で語った三博士に象徴される宗教の調和的統一に共通点を感じ取れる。

そしてこの『詩と真実』では更に、『秘儀』とも共通する「精神変容」や「普遍的な信仰」といった要素に加えて語られているもうひとつの要素もまた注目すべきことである。ここでゲーテはその「普遍的な信仰」に至る精神変容のなかで、「デモーニッシュなもの」と呼ぶものの存在を感じ取った、と述べている。この「デモーニッシュなもの」という概念はゲーテ研究でも時折テーマとなる概念である。デモーニッシュ Dämonisch とはすなわちデーモン Dämon、そのもとを辿ればダイモン δ α ι μ ω ν のことである。このダイモン＝デーモンという言葉は、現代では悪魔の代名詞のひとつがデーモンであるように、その時代や領域ごとに意味合いは変わってくる。一般的な解釈ではダイモンは現代で言う守護霊・指導霊のような意味を持つ存在であり、その力により個人の運命をつくりだせる存在である。

プラトンの『饗宴』では、巫女ディオティマがダイモンは神と人間の中間の存在であり、占い、犠牲、予言といった巫女や僧侶の技術はダイモンを通して神の力や意志を人間につたえるものであると話している。またソクラテスは子供の頃からそのダイモニックなもの声をきいていて、些細なことから大きなことまで「これをしてはいけない」とそれはいつも告げて来た<sup>31)</sup>。

その後初期キリスト教やネオプラトニズムなどの展開を経てこの力に「善いもの」と「悪いもの」との区別が生じ、人間に悪しき運命を与えるいわゆる悪魔としてのデーモンとなる。ドイツ語圏の作家もしばしばこのダイモン＝デーモン＝デモーニッシュなものに関する記述をしているが、作家によってそのイメージは様々である。おおよそは普通の意味での人間に災いのみをもたらず悪の代名詞的存在としての悪魔 Teufel と運命を司るデーモン Dämon は区別されるが、当然ながらそれらは時に混ざり合い、デーモン＝デモーニッシュの特異なイメージをつくりあげるのである。ゲーテにおけるデモーニッシュが何であるかに関しては、この自伝の著述以外では以下の三つの著作が特に典拠となりうる。

まずはこの『詩と真実』同章でも語っている自身の1787年の戯曲『エグモント』*Egmont*である。そこで彼が扱ったラモラル・ファン・エフモントの生涯のなかにデモーニッシュなものがあると述べられている。

ふたつめには1817年に書かれた『原初の言葉、オルフェウス風に』*Urworte, Orphisch*という詩集が挙げられる。そこでは古代ギリシアのオルペウス教の思想に刺激を受けそれを彼なりに解釈した詩が書かれており、そのなかにはΔ A I M Ω N (ダイモーン)という詩が存在する。また1820年にはその詩に関するゲーテ自身の解説のなかでこの詩全体の解説を述べている。

そして晩年のゲーテとヨハン・ペーター・エッカーマン (1792-1854)との対話録である『ゲーテとの対話』*Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*において、それぞれ1828年3月11日、1829年3月24日、1830年3月14日、1831年の2月18日、28日、3月2日、8日、18日、28日、30日、6月20日の対話でゲーテ自身がデモーニッシュなものに関して語っている。これらの箇所からゲーテのデモーニッシュについて知ることができる。これらの著作等から読みとれるゲーテのデモーニッシュが持っている特徴をまとめると、以下のようになる。

- ・それは、人間の中に何か「これをしなければいけない状態」を強いられることである。それはそのような気分でもあるし、同時にそのような環境をつくりだすような「偶然の出来事があるひとつの方向性にとって操作する」力でもある。仕事の邪魔が入ったり、入らなかったり、逆にうまい具合に仕事の話が入って来るなどがつながって、その出来事の組み合わせによってのみ可能となったと後から思えるような何らかの結果をもたらす。芸術家がつくった有名な作品なども、この力によってなされることが多い。
- ・歴史上の事件は、そういった力に導かれた個人と集団によって起こされている。個々人や集団の意志決定が歴史をつくっていくが、そのどちらを選ぶかの意志決定はこの力の意図によってなされる。すなわち、この力が世界の動きをつくっているとも言えるのである。
- ・ある人の誕生の際に決定される、そこから逃れることなどできないような性格やものごとの方向性でもある。すなわち、ゲーテによれ

ば古来より占星術で星の配置と角度によって決められるとされてきたそれと同じものである。誕生の時に決定されたそれらの個性や特徴が、人間の方向性の選択に作用を及ぼして未来の運命もつくっていく。

- ・このデモーニッシュな作用は、『ファウスト』のメフィストフェレスのような存在ではなく<sup>32)</sup>、より肯定的な行動力で現れる。(すなわち、「これをしなければいけない状態」を強いられているということは、本人が心から「これをせずにはいられない」という状態なのだろう。)
- ・このデモーニッシュなものは、その個人への作用が消えてしまうことがある。(つまり、その力が強い時と弱い時のような状態とが存在するということなのだろう。)

前述の『詩と真実』によればゲーテがこのように考えた「デモーニッシュなもの」は彼の宗教探求の果てに見つけ出した概念である。歴史や宗教を深く観察していくうちにその動きや方向性のなかに何らかの超越的存在による意志のようなものをゲーテは感じ取り、その存在に最も近いものが古代において考えられていたダイモンという存在であると考えたのである。

例えば、前に述べたシュタイナーが「秘儀参入」と呼んだゲーテの19歳頃の闘病生活においては、生死をさまよう重病の果てに錬金術的な薬の投与によってその全く歯が立たなかった病気が回復し、そのような出来事はゲーテに錬金術への特別な興味を与えた。このように異様な病気からの解放の際に錬金術というものを伴うことで、ゲーテにおいて錬金術の持つ価値観が独特のものとなった。このように病気からの解放というタイミングで錬金術がもたされたということは、その独特の錬金術への価値観を築くためにまるで何かにタイミングが調整されているかのようなのである。そのタイミングによってはじめて可能になるその変容が行われたというべきところである。それはまるで成功した一度限りの錬金術の実験のようである。こういったタイミングの調整のようなものもまたデモーニッシュな作用と考えられるだろう。

ゲーテの『秘儀』の物語中にも『秘儀』解説にもこのようなデモーニッシュなものの自体には言及されていない。だが、『秘儀』はまず

『詩と真実』で言う「普遍的な信仰」へ至る道を少なくとも表現しようとしたものであり、デモーニッシュはその『秘儀』で表現しようとした「普遍的な信仰」へ至る道の途中でゲーテが感じ取ったと述べている存在なのである。すなわち、『秘儀』はデモーニッシュをゲーテが感じる過程について表現した（未完成の）著作だとも言える。

## V. 結語として

ここまで見て来たように、全体としてゲーテの『秘儀』は様々な様相が見て取れる物語である。今まで見てきたそれらの全体をまとめると、以下のようなになる。

ゲーテは彼が生きていた当時のヨーロッパにおける、ヨーロッパの外側の宗教への興味と探求の風潮に沿うように、またそのような探求をしたヘルダーからの影響もあり、当時知られていた世界中の宗教を知った。その宗教の探求のなかで、世界中の宗教の個別の差異と共通点をそのうちに見て、「宗教の原点」の存在を考えた。教義や儀式が違っていても、神を信仰するという本質は共通しており、そこから「宗教の原点」を見た。その人間と神との間のより純粋な心における関係性が宗教の本質であり原点であると『秘儀』で描写しようとした、という解釈がまずできる。

そして次に、シュタイナーの観点もそこに含まれるが、それは同時にゲーテ自身が体験したとみなすこともできる錬金術の精神変容の物語としても解釈できる。そしてその精神変容によって「宗教の原点＝普遍的な信仰」へと辿り着くのである。そのような「普遍的な信仰」とはすなわち、シュタイナーも『秘儀』講義で語っているような世界中の宗教の調和的・平和的融合としての宗教信条のことである。

またそのような探求の先にはゲーテが「デモーニッシュなもの」と呼んだ存在があった。その『秘儀』でも語られようとしていたところの「宗教の原点＝普遍的な信仰」への探求を通してデモーニッシュなもの存在はゲーテに感じ取られたのである。ゲーテの『秘儀』は以上のような著作として位置づけられると言えるだろう。

## 注

- 1) *Goethes Werke*, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, München:C.H.Beck, 1981, Bd.2 S.705. 以下同ハンプルク版全集をHAと記す。この箇所は、1815年8月3日のゲーテの友人ボワスレー Sulpiz Boisserée の叙述によるもの。
- 2) ヨーロッパとシャーマニズムの関わりについては、グローリア・フラハティ『シャーマニズムと想像力』、訳：野村美紀子、工作舎、2005、の全体、及びヨーロッパにおけるゾロアスター教の紹介は、前田耕作『宗祖ゾロアスター』筑摩書房、2003、66-108頁等の書籍を参照。
- 3) 高橋健二『若いゲーテ評伝』河出書房新社、1973、120-126頁、濱田真「1780年代のゲーテとヘルダー：ゲーテ形態学とヘルダー歴史哲学の接点」慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』vol.91, No.2, 2006、157-159頁などを参照。
- 4) 前掲書「1780年代のゲーテとヘルダー」、166頁、小田部胤久「ヘルダーの原型論」『モルフォロギア ゲーテと自然科学』vol.7、1985、45-46頁
- 5) HA Bd.2 S.705f.
- 6) 『ゲーテ全集 2巻』訳：生野幸吉ほか、潮出版社、2003、518頁
- 7) 高橋健二『ヴァイマルのゲーテ評伝』河出書房新社、1975、58-59頁
- 8) クリストファー・マッキントッシュ『薔薇十字団』吉村正和訳、平凡社、1990、178-179頁
- 9) HA Bd.2 S.271 ff.
- 10) ルドルフ・シュタイナー『薔薇十字会の神智学』西川隆範訳、平河出版社、1985、309-312頁、マンリー・P・ホール『象徴哲学大系Ⅲ カバラと薔薇十字団』訳：大沼忠弘、山田耕士、吉村正和、人文書院、1981、149-167頁、マンリー・P・ホール『象徴哲学大系Ⅳ 錬金術』大沼忠弘・山田耕士・吉村正和訳、人文書院、1981、109-129頁、吉村正和『錬金術』河出書房新社、2012、35、37-38頁、等を参照。
- 11) *Goethe Werke*, Weimar:Hermann Böhlau, 1891, Teil4 Bd.7 S.232.
- 12) HA Bd.2 S.706.
- 13) モンセラート (Montserrat) とはスペイン、カタルーニャ地方のバルセロナ近くにある山で、キリスト教の聖地でもあり、また山中にはモンセラート修道院がある。ゲーテはこのモンセラートに関しては1800年のヴィルヘルム・フォン・フンボルトのスペイン旅行記のなかで彼が訪れたモンセラートに強い印象を受け、このように書いたとされている。『ゲーテ全集 13巻』訳：岩崎英二郎、関楠生、小岸昭、芦津丈夫、潮出版社、2003、422頁を参照。
- 14) キリストのエルサレム入城後、十字架の受難を経て復活する前日までの一週間のこと。

- 15) HA Bd.2 S.281 f.
- 16) Ebd. S.705.
- 17) ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ『化学の結婚』訳：種村季弘、紀伊國屋書店、1993、には『化学の結婚』のほか本文中で述べた「薔薇十字の名声」「薔薇十字の信条告白」の日本語訳、及び解説が載っているため、そちらを参照。
- 18) 西川隆範『シュタイナー用語辞典』風濤社、2002、311-318頁の年譜を特に参照。
- 19) Rudolf Steiner, *Natur- und Geisteswesen – ihr Wirken in unserer sichtbaren Welt* (GA98), Dornach/Schweiz: Rudolf Steiner Verlag, 1996, S.57 ff.
- 20) ここでアストラル体 astral body やエーテル体 etheric body というのは神智学協会の創始者ブラヴァツキー夫人の『シークレット・ドクトリン』*The Secret Doctrine* をはじめとする神智学における用語である。アストラル体 Astralleib、は astr すなわちギリシア語の ἀστῆρ : 星を意味する語から来ているが、シュタイナーにおいてはおおよそ人間の意思・情念・熱望・感情そういった原動力となる力を表している。エーテル体 Ätherleib はギリシア語の αἰθήρ : 天界・神界を構成する空気の意味を表す語から来ており、シュタイナーにおいては生物の生命力、すなわち生物がその形を維持する力や損傷箇所を治し強化する力などがエーテル体の力として説明される。またシュタイナーにおいてはよく人間の構成要素として自我 Ich、アストラル体、エーテル体、物理的肉体 Physischeleib から成ると説明される。それに対し動物はアストラル体、エーテル体、物理的肉体を持ち、植物はエーテル体、物理的肉体を持ち、鉱物は物理的肉体(物質体)のみを持っている。参照：西平直『シュタイナー入門』講談社、1999、118-134頁、及び西川隆範『シュタイナー用語辞典』風濤社、2002、23-26頁：項目「アストラル体」、61-68頁：項目「エーテル体」、114-118頁：項目「個我」、240-243頁：項目「物質的肉体」、ほかシュタイナーの著作等。
- 21) GA98, S.65 ff
- 22) この初期キリスト教とその秘教的な寓喩性についての詳細は、上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典 第4巻』研究社、2009、171-172頁、ジャン・ダニエル『初代教会 キリスト教史1』平凡社、1996、296-306頁、等も参照。
- 23) 澤井繁男『魔術と錬金術』192-195頁、226-231頁、筑摩書房、2010、C・G・ユング『心理学と錬金術 II』訳：池田紘一、鎌田道生、人文書院、1976、9-12頁、29-33頁、65-71頁ほか、も参照。同じように錬金術の歴史を研究し、ゲーテの著作とも関わりの深いC・G・ユングは『心理学と錬金術』*Psychologie und Alchemie* をはじめとする著作でいわゆる現在知ら

れているユング及び一部のユング派的な深層心理学もまたここでシュタイナーがゲーテの文学の方法論として語っているような錬金術的の寓喩を通じた精神変容に根ざしていることは大変興味深いところであるが、それ自体は論文の題目ではないためここでは詳しくは言及しない。

- 24) *Goethes Bibliothek*, Hans Ruppert, Weimar:Arion, 1958, S.464f.
- 25) Rudolf Steiner, *Die Theosophie des Rosenkreuzers* (GA99), Dornach/Schweiz: Rudolf Steiner Verlag, 2005, S.13
- 26) HA Bd.9 S.342f.
- 27) GA99 S.13f.
- 28) 1908年10月15日から1909年5月6日までの講演録 *Wo und wie findet man den Geist?* (GA57) の1909年3月11日の講演 *Die Rätsel in Goethes «Faust» exoterisch* より。邦訳：ルドルフ・シュタイナー『ゲーテ 精神世界の先駆者』編訳：西川隆範、アルテ、2009、122-124頁を参照。
- 29) 『ゲーテ全集 10巻』訳：河原忠彦、山崎章甫、潮出版社、2003、356-360頁
- 30) *Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke. Briefe Tagebücher und Gespräche*, Teil.1 Bd. 14 - *Aus Meinem Leben Dichtung und Wahrheit*, Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker, S.839、以下同 Deutscher Klassiker 版ゲーテ全集をDKと記す。
- 31) 田中龍山「ソクラテスのダイモニオンと理性（ロゴス）」『龍谷哲学論集』24号、2010、及びプラトン『饗宴』訳：久保勉、岩波書店、1988、107-108頁を参照。
- 32) Ebd. S.455f.

## 参考文献

- Gero von Wilpert, *Goethe-Lexikon*, Stuttgart:Alfred Kröner, 1988
- Goethes Werke*, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, München:C.H.Beck, 1981,  
Bd.1: Gedichte und Epen I
- Goethes Werke*, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, München:C.H.Beck, 1986,  
Bd.3: Dramatische Dichtungen I
- Rudolf Steiner, *Mein Lebensgang* (GA28), Dornach/Schweiz:Rudolf Steiner Verlag, 2000
- Rudolf Steiner, *Das Christentum als mystische Tatsache und die Mysterien des Altertums* (GA8), Dornach/Schweiz:Rudolf Steiner Verlag, 2002
- エリザベス・シューエル『オルフェウスの声：詩とナチュラル・ヒストリー』  
訳：高山宏、白水社、2014
- 川村和宏『ミヒャエル・エンデの貨幣観』三恵社、2011
- 『ゲーテ全集 4 戯曲』訳：中田美喜ほか、潮出版社、1979

- コリン・ウィルソン『シュタイナー その人物とヴィジョン』訳：中村保男・中村正明、河出書房新社、1994
- 新保弼彬「見霊者ゲーテとその文学（2）」『言語文化論究』14号、2001
- 高橋義人「ゲーテと錬金術」『モルフォロギア：ゲーテと自然科学』vol.24、2002
- 田村一郎「『塔の結社』論序説：ゲーテと『秘儀結社』」『札幌学院大学人文学会紀要』60号、1997
- 土橋寶『ゲーテ世界観の研究—その方法と理論』ミネルヴァ書房、1999
- 山下肇『ゲーテ読本』潮出版社、1999
- ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ『色彩論』訳：高橋義人ほか、工作舎、1999
- ルドルフ・シュタイナー『ゲーテの世界観』訳：溝井高志、晃洋書房、1995
- ルドルフ・シュタイナー『シュタイナー自伝 上 1861-1894』訳：西川隆範、アルテ、2008
- ルドルフ・シュタイナー『神秘主義と現代の世界観』訳：西川隆範、書肆風の薔薇、1989